

## 所員自著紹介

1. 書名：『日本／フィリピン歴史対話の試み：グローバル化時代のなかで』
2. 著者：永野善子
3. 出版社：御茶の水書房
4. 出版年月：2016年3月31日
5. ページ数：iv+195頁+x

本書は、日本とフィリピンを帝国アメリカのもとで対峙させることによって、日本の「知の植民地」状況を超える方法をポストコロニアルの視点から探った試みである。フィリピンにおける歴史研究や論争を紹介した上で、19世紀末のフィリピン革命の英雄ホセ・リサールのアメリカ植民地期における神格化過程と戦後日本の象徴天皇制との比較検証や、グローバル化時代の日本社会の変容と海外出稼ぎ・国際結婚などの議論を通して、二つの社会にアメリカ性が内在する歴史的根拠と経緯を明らかにしている。

(永野善子)

1. 書名：『テキスト分析入門 小説を分析的に読むための実践ガイド』
2. 著者：松本和也（編）
3. 出版社：ひつじ書房
4. 出版年月：2016年10月
5. ページ数：264頁

本書はタイトル・サブタイトルが示す通り、ストーリー読解やテーマ理解だけでは拾いきれない、小説に固有の仕掛けや技術を学ぶための入門書である。別のいいかたをすれば、ごく個人的に感じとられた小説の面白さや感動などが、どのような表現によってもたらされたものなのかを、客観的に分析・説明するための手引きである。

もとより、こうしたアプローチは、いかなる意味でも新しいものではない。ロシア・フォルマリズムを経た構造主義において花開いた、ナラトロジー（物語論）と称される理論／体系がすでにあ

り、それを輸入した日本においてもこうした分析手法の概説書もあり、またそれを援用した論文も少なからず発表されてきた。それでも、テキスト分析のための分析概念の紹介・解説と、その実践的な応用をセットにした入門書は、これまでなかった。

内容としては、夏目漱石『夢十夜』「第一夜」、森鷗外「高瀬舟」、芥川龍之介「南京の基督」、川端康成「伊豆の踊子」、岡本かの子「老妓抄」、太宰治「桜桃」について、作家・作品（研究史）を紹介した上で、登場人物の心理などの情報がどのように制御されているか、出来事の生じた順序は小説内でどのように配置されているか、そもそも語り手はいつ・どこからその物語を語っているのか、などの観点から、具体的な分析例を多数提示することを目指した。小説その他のテキストに関心をもつ人々に、テキスト分析を学ぶ一助になれば幸いである。

(松本和也)

1. 書名：『「海邦小国」をめざして ― 「史軸」批評による沖縄「現在史」』
2. 著者：後田多敏
3. 出版社：Mugen
4. 出版年月：2016年7月
5. ページ数：320頁

沖縄で起きている出来事や沖縄―ヤマトの重層的な歴史的関係を無視して論じられるさまざまな言説を、「史軸」批評という方法にもとづいて論じた評論集。2000年から15年までに雑誌や新聞等に発表した論考35本が収載されている。沖縄の島々の歴史や文化、人々の暮らしなどに軸足を置きながら、東アジアに位置する島嶼群の「現在」を読み解き、海邦と呼ばれた島々の未来の政治社会「海邦小国」やその原理を「まーゆ（真世）」として描く。そして、辺野古新基地建設問題や「歴史認識の修正」の動きなど、現在の沖縄の課題を歴史の中に位置付けその「根底にあるも

の」を解き明かしている。

(後田多敦)

1. 書名：『会話分析の基礎』
2. 著者：高木智世・細田由利・森田笑
3. 出版社：ひつじ書房
4. 出版年月：2016年12月7日刊行
5. ページ数：361頁

会話分析は、日常会話の詳細な分析により相互行為の秩序を明らかにすることを目的として社会学から生まれた学問分野である。本書は、相互行為を分析する際の視点や会話分析が目指すものをわかりやすく解説し、豊富な事例と各章末の課題を通して会話分析の基礎を学べるようにした入門書である。

まず、第1章では、そもそもなぜ「日常会話」に着目するのかという点を糸口に会話分析の知的源流と成立を概説している。2章では会話分析の視点と研究プロセスについて述べている。ここでは、とりわけ談話分析の研究との違いを明らかにした上で会話分析の研究プロセスと会話データの取扱いに伴う倫理的問題点、および会話分析研究の信頼性、妥当性、客観性について解説している。第3章から第5章にかけては日常会話の基本組織として、順番交替（第3章）、行為の連鎖と優先組織（第4章）、および修復（第5章）を紹介している。第6章では、日常会話においてしばしば生じる「物語（自分の体験や過去の出来事など）を語るふるまい」について検討している。第7章では、私たちが常に受け手に合わせて発話をデザインしていることについて特に人や場所の言及に焦点を当てて論じている。さらに、第8章では、相互行為の中で「文法」を捉えるとどのようなことが見えてくるかを明らかにしている。最後に、第9章では、制度的場面の相互行為およびその一例として教室相互行為に焦点を当てて紹介している。

なお、細田が1章、2章（高木と共同執筆）、5章、6章、7章、9章、高木が2章（細田と共同執筆）、3章、4章、森田が8章の執筆を担当した。

(細田由利)

1. 書名：『植民地主義論』再考 グローバルヒストリーとしての「植民地主義批判」に向けて』
2. 著者：小倉英敬
3. 出版社：揺籃社
4. 出版年月：2017年1月10日
5. ページ数：278頁

1998年7月に国際刑事裁判所（ICC）の設立に向けて採択された『ローマ規定』の第7条に「人道に対する罪」が規定され、また2001年8月末～9月初めに南アフリカのダーバンで開催された国連主催の所謂「ダーバン会議」において植民地主義、奴隷貿易、奴隷制が告発されて以降、米国やカリブ海諸国において植民地主義や奴隷貿易・奴隷制に関する謝罪要求・賠償請求の動きが活発化し、「植民地責任」論が主張されている。

2013年8月にCARICOM（カリブ共同体）諸国が旧植民地5ヶ国に対して謝罪要求・賠償請求を求める決議案を採択した。また、米国では、2014年8月に白人警官による黒人青年射殺事件が発生したことを契機として全国的な黒人擁護運動である「BLACK LIVES MATTER」が結成され、2016年8月には奴隷制に関する賠償請求を行うことを決定している。

これらの動向はフランスなどのヨーロッパで多発している旧植民地諸国からの移民2・3世による「ホームグロウン」型テロが頻発する動きと同根を持つ同時代的な世界的減少である。その背景には1415年のポルトガルによるアフリカ北岸のセウタ占領から始まったヨーロッパ植民地主義列強による世界支配の「負」の遺産がある。

1960～70年代には大多数の旧植民地主義諸国が独立を果たしたが、これら諸国は今もなおポストコロニアルな状況下にあり、さらに世界的にも「植民地主義」は、「グローバル化」時代においても外貌を変えて、国内植民地問題、グローバル・シティのヒエラルキー、外国人移民問題の形で継続している。本書は、このような問題意識から、「植民地主義」をより本質的に考察するために、その歴史的段階区分をはじめ、「植民地主義論」の総論的な再構築を試みた。

(小倉英敬)